地震一口メモ No.196

11 月５日「世界津波の日」に考える

濱口梧陵と稲むらの火

11 月５日は「世界津波の日」です。これは 2015 年に国連総会本会議で採択されて決定したものです。日本国内でも「津波防災の日」と定められています。11 月５日となったのは「稲むらの火」という話に由来します。「稲むらの火」は安政元年（1854 年）11 月５日に和歌山県広川町を安政南海地震による大津波が襲った際に、濱口梧陵が稲むら（稲束を積み重ねたもの）に火を放って早期に警報を発したことで、村人が避難して命を救われたという話です（話の中では梧陵は五兵衛として書かれています）。稲むらを焼いてしまうのはもったいないことですが、濱口梧陵は村人の命を救うために丘の稲むらに火をつけ、暗やみでどこへ逃げればいいのかわからずさまよっていた村人は火を目指して丘に登って津波から逃れることができました。「稲むらの火」の逸話は昭和 12 年から 10 年間国定国語教科書に掲載されて児童に語り継がれました。今から 160 年以上前の話ですが、津波の危険を感じたら自ら行動すること、自分だけ助かろうとするのではなく、まわりの人を助けるという精神など今も学ぶべき点が多くあります。

濱口梧陵は震災後の復興にも取り組みました。被災者用の小屋の建設、農機具・漁業道具の提供をしたり、今後の津波から村を守るための堤防（広村堤防、和歌山県）の築造を指揮しました。この堤防の建設費の大半は濱口梧陵の私財で賄われました。1946 年の昭和南海地震の津波が襲来した際に、この堤防は多くの広川町の住民の命を守りました。このような復興への取組や、過去の災害から学び将来に備えるということも見習うべきところです。

世界津波の日が定められた目的には、世界中の人々が津波に対する意識を向上することがあります。この日に合わせてこれまで多くのイベントなどが開催されてきました。そのイベントの一つである“「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山”に筆者も参加させていただいたことがあります。世界から来た高校生が防災や減災について国をまたいで議論し、発表している姿を見て、自身も改めて考えさせられました。防災の重要性は少し大きな地震が起こると再認識すると思います。しかし忘れたころに大きな災害が起こる可能性も大いにあります。災害にあわずとも、この「世界津波の日」などをきっかけに防災について考えることが大事です。今年もご家族やまわりの方と”サミット”を開催して防災について話し合ってみてはいかがでしょうか。

濱口梧陵
国立国会図書館 HP から転載

紙芝居「津波だ！いなむらの火をけすな」より
内閣府 HP から転載
https://www.tokeikyou.or.jp/bousai/inamura-pshow-top.htm

和歌山県広川町にある**「稲むらの火の館」**では、濱口梧陵の偉業や精神、災害から命を守るための津波の知識などを学ぶことができます。ぜひこの機会に行ってみてはいかがでしょうか。
稲むらの火の館 HP ： https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/